

看護に SOC を どう活用するのか

sense of coherence(首尾一貫感覚, コヒアランス感; SOC)とは, 簡単にいえば自分自身の生活世界に対する見方・向き合い方の感覚である。イスラエルの健康社会学者 A. アントノフスキー(Antonovsky)によれば, この感覚は, 生活や人生に存在するストレスを成功的に処理し, 健康に導く機能をもつとされている。

筆者の出身校である東京大学大学院の健康社会学教室では, 教室主任の山崎喜比古准教授を中心として 1996 (平成 8) 年頃より健康生成モデルと SOC の理解, および SOC スケール開発を目的とした「アントノフスキー研究会」を実施し, その後 2001 (平成 13) 年より, SOC 概念の理解とその研究推進や最新の知見について議論する「SOC 研究会」と名称を変えて, いまなお研究を続けている。そのメンバーが中心となって 2008 (平成 20) 年 5 月には, SOC 研究のガイドブックともいえる『ストレス対処能力 SOC』(有信堂高文社刊)を刊行した。

しかし, 本書は必ずしも看護学領域のみを焦点にしたものではない。その一方で, SOC 研究の一大勢力ともいえる看護学領域で, 理論的にも実践的にも, SOC をどのように活用すればよいのかに言及した書も見当たらない。そこで看護に SOC 概念はどう取り込まれるのか, その余地はあるのか, あるいは, SOC 概念と看護はそもそも親和性があるものなのかなど, SOC の概念と看護の関係について思考を深める機会をもちたいと, 筆者らはかねてから考えていた。

本焦点では, まず SOC 概念の概要, SOC の測定, 看護学領域での研究動向の 3 つを基礎的な知識として提示し, 続いて SOC を活用した実証研究例, そして今後の課題として重要な SOC の形成発達理論開発の取り組みに言及するという構成とした。執筆にあたって, わが国における SOC 研究の第一人者ともいえる山崎喜比古氏と坂野純子氏に協力を仰いだ。両者ともに前掲書の編者であると同時に, 看護系研究者と共同研究をたびたび行なっており, この領域における SOC 研究について熟知されている。また, 実証研究例では, 看護師としての実務経験をもち, 現在博士後期課程で学位論文の研究に取り組む 2 名に執筆を依頼した。

本焦点は, SOC 概念と看護について言及するわが国で初めての特集といってよい。さらに看護学領域のみならず, わが国における SOC 研究の先端をゆく内容と自負している。前掲書とあわせて読んでいただくことで, SOC ならびに健康生成モデルに関する理解がもっと深まるものと思われる。本焦点が看護学領域における SOC 研究, ならびにその理論的実践的活用の糧となれば幸いである。

(企画: 戸ヶ里泰典 山口大学大学院医学系研究科講師
山崎喜比古 東京大学大学院医学系研究科准教授)